

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟選

ドアマンの白き直立秋の雲

流山市 小林 紀彦

△評▽白い制服を着て客を待つホテルのドアマン。「白き直立」の表現が印象的で、背筋を正した姿がさわやかだ。

秋草をフラスコに挿す少女かな

仙台市 伊藤 和彦

△評▽理科の実験用のフラスコなのだろう。学校でひとり草花を愛する少女に詩情を感じる。

ペガサスの羽はたいいてる夜空かな

須崎市 野中 泰佑

力学の統ぶる宇宙や星涼し

北本市 萩原 行博

新涼や早朝ラジオ英会話

鹿嶋市 津田 正義

まだ誰も踏まぬ筈目城涼し

福山市 佐藤 育子

髪ひとすぢ肌につりつく極暑かな

大阪市 工原千賀子

打水を終えて静かに客を待つ

福岡市 長島 一夫

蝸や弟逝きて二十年

和歌山市 植村 弘

パイプ椅子たたみ八月終はりけり

平塚市 高橋 佳代

西村 和子選

影の無い人もあさうな盆踊

米子市 永田富基子

△評▽つまり亡者も混ざっているかもしれない。盆踊りの本意を思うと実感あり。異界がすぐそこに感じられるようなさびしさ。

秋の暮たやすく人は闇に溶け

甲府市 村田 一広

△評▽すぐに暗くなる季節の心細さと同時に、人間存在のほかなさが感じ取れる作品。

からからと笑ふ姫やバス通路

中津市 姫野 悦子

建て替えて一戸が三戸草の花

横浜市 鍋島 武彦

新人の一句特選句座涼し

等間市 伊藤 邦夫

白木樺落としてゆきぬ通り雨

岡山市 三好 泥子

曼珠沙華とこかで人の話し声

周南市 加藤 憂子

休暇明けスプリングカー全開す

東京 福島 隆史

金堂は朝の読経や曼珠沙華

市川市 高野 厚夫

二階より真夜の満月独り見る

丹波篠山市 西尾 菜月

井上 康明選

大滝の地鳴りの中に下り立ちぬ

唐津市 梶山 守

△評▽まっすぐに落ちる滝が大地に響くのを、作者は全身で感じとっている。滝の傍らを水しぶきを浴びながら下りてきたのだ。

向日葵の蕊黒々と雨を待つ

久留米市 持地 恒美

△評▽ヒマワリの花の真ん中は、種がぎっしり並び黒い。太陽の下、そのしべを掲げて雨を待つ。

秋澄むや白球高く河川敷

東京 高木 靖之

太刀魚の折り曲げられて箱の中

倉敷市 中路 修平

はたきこみに負けた相撲の腹の土

東京 野上 卓

秋の夜の星を綴りて賢治の忌

相模原市 小山 鞠子

台風的眼や星空の潤みけり

国分寺市 野々村澄夫

重陽や山の頂雲かから

相模原市 はやし 央

一山に八十八秋彼岸

岡山市 三好 泥子

発心の一番札所山ぶどう

八街市 山本 淑夫

片山由美子選

秋の夜や絵本の中の村灯る

葛城市 山中 由子

△評▽秋の夜の村を描いた絵本を開いているのだ。そこにともっている灯が現実と重なり、ほのぼのとしたものを感じさせる。

描きたくなるほど大き林檎かな

川口市 高橋さた子

△評▽立派なりんごを前にしてまずは描いてみたいとは、絵どころのある人ならではの口。

朝市の露けきものを露に置き

東京 福島 照子

晴れわたる海より青し蛸草

福津市 瀧 あき子

もろこしを焼く香に子らの集まりぬ

和歌山 桑原 里美

をさな子のよのそひくるや夕端居

小平市 齋藤 幸枝

秋天へ声重ねゆく漕艇部

浜松市 野畑 明子

蟬の声全山揃ひはたと止む

伊万里市 田中 秋子

となりに釣りの人ひとり秋うらら

大阪市 吉田 昌之

公園のベンチにこぼれ秋の花

芦屋市 水越 久哉

出会いの

季語

秋のよき日に

高田正子

9月の末、小石川後樂園(東京都文京区)を歩いた。昨年10月にも訪ねた水戸徳川家ゆかりの庭園であるが、ひと月前だったこともあって、様子がまるで異なっていた。例えば昨年は刈り入れ後であった小さな田には稲穂が揺れ、それを守るべく、案山子が何体も踏ん張っていた。みちのくのつたなきさがの案山子かな 山口青邨 案山子といえはとっさに思い出すのがこの句だが、この庭園ではさにあらず。先頭に立っていたのは明らかに水戸黄門光圀公。かつてテレビで見たとおりのコスチュームに、思わず近寄ってしげしげと見つめると、お顔は手彫りと思われる木の面であった。 こんな具合に面白いものがたくさんあったのだが、それらをさしおいて最も愉快だったのは、庭園前に集合したときのことだった。 実はその日は田中裕明賞の授賞式兼行句会であった。この賞は45歳未満の俳人の句集に贈られるもので、その場に集合した人々の平均年齢は、ふだんの句会ではあり得ないほど若い。そこへ、更に若い受賞者の岩田奎さん(24)が現れた。手に何かを持って、そのりそのり。 ・受賞者として蟬を捧げ持ち 高田正子 道すがら見つけたのだぞうだ。既に腹の大きい蟬(カマキリ)であった。このあと庭園に放たれたから、来年ここでその子らに会えるかもしれない。 年齢、性別、職業を超えて集まるようしさをたっぷり味わった一日であった。(たかだ・まさこ)俳人